

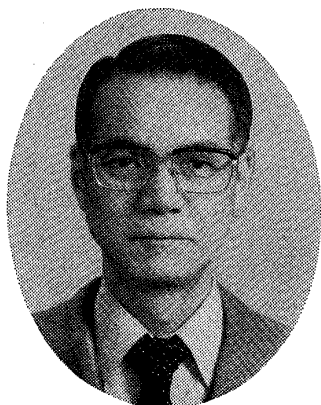
日 本 鉄 鋼 協 会 役 員

会 長



久 松 敬 弘
東京大学名誉教授
日新製鋼(株)常勤顧問

副 会 長



森 一 美
(研究担当兼務)
名古屋大学教授

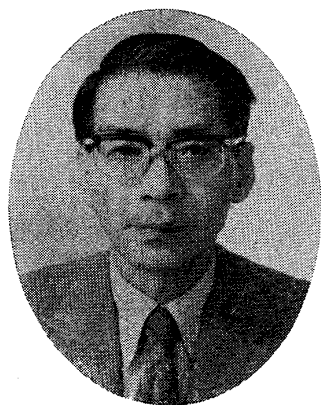


山 本 全 作
新日本製鉄(株)専務取締役

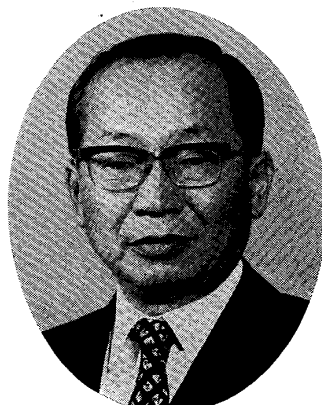


木 下 亨
専務理事 兼務

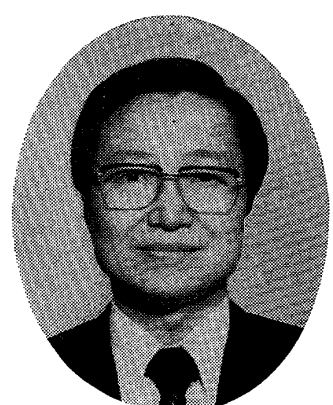
理 事



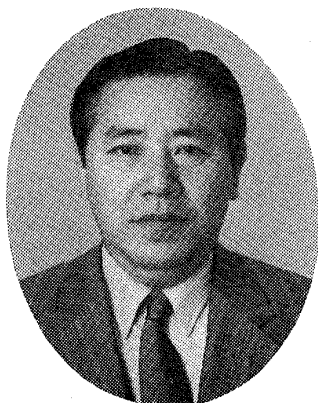
三 井 太 佑
常 務 理 事



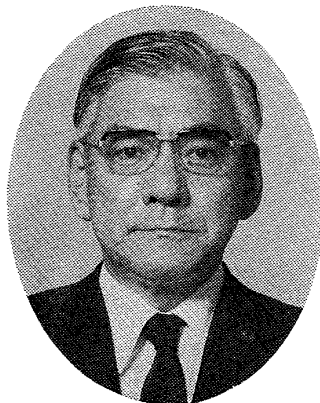
歌 橋 千 之
(企画・研究担当)
川崎製鉄(株)常務取締役



内 仲 康 夫
(研究担当)
通商産業省基礎産業局製鉄課長



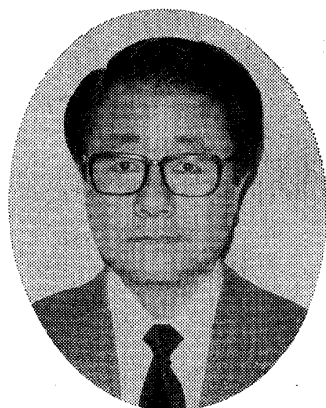
小 野 陽 一
(編集担当)
九州大学教授



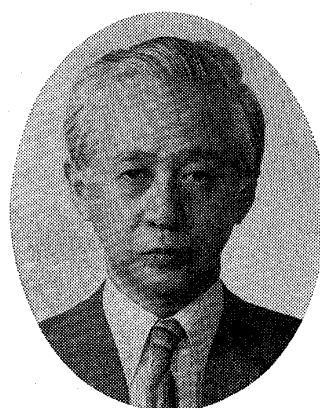
川 口 三 郎
(庶務担当)
(株)日本製鋼所顧問



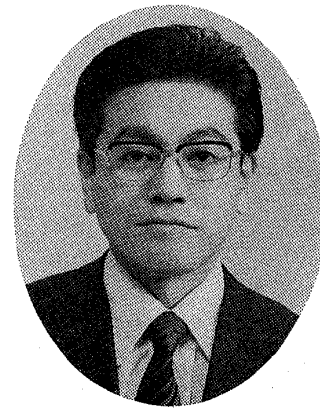
木 村 宏
(研究担当)
東北大学教授



河 野 拓 夫
(企画担当)
新日本製鉄(株)取締役



権 藤 永
(企画・編集担当)
(株)中山製鋼所取締役



雀 部 實
(編集・会計担当)
千葉工業大学教授



佐 野 信 雄
(編集担当)
東京大学教授



鈴 木 朝 夫
(編集担当)
東京工業大学教授



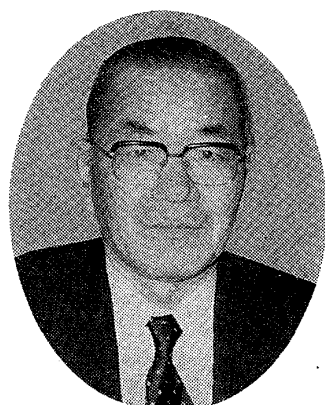
高 橋 忠 義
(研究担当)
北海道大学教授



高橋 久
(研究担当)
東洋鋼板(株) 常任顧問



竹内 久彌
(企画担当)
住友金属工業(株) 常務取締役



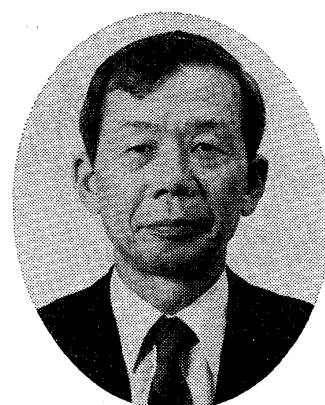
竹下 勅三
(庶務担当)
日本鉄鋼連盟 常務理事



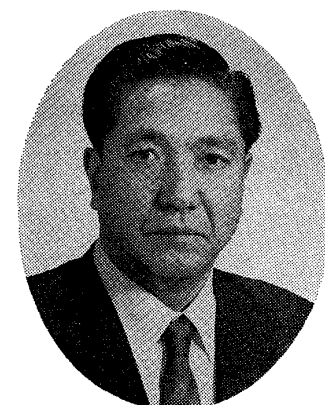
田中 良平
(研究担当)
横浜国立大学教授



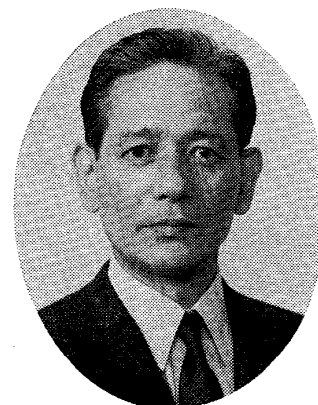
豊島 陽三
(会計担当)
トピー工業(株) 専務取締役



永井 親久
(会計担当)
(株)神戸製鋼所 常務取締役



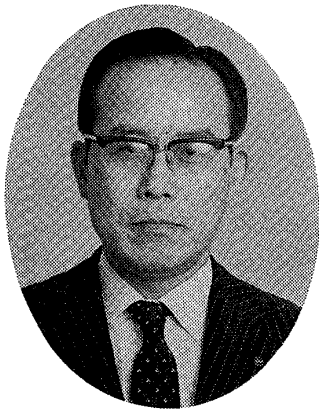
萬谷 志郎
(企画担当)
東北大学教授



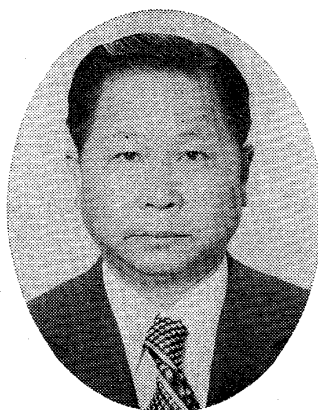
福岡 利和
(庶務担当)
大同特殊鋼(株) 常務取締役



牧 正志
(編集担当)
京都大学助教授



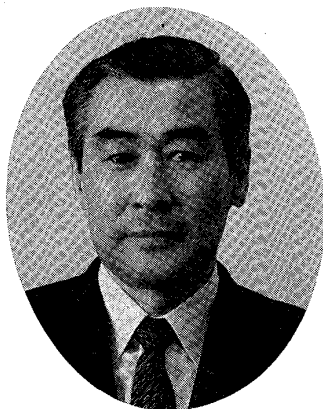
松原博義
(庶務担当)
日本鋼管(株)常務取締役



森省二
(会計担当)
日新製鋼(株)専務取締役



森田善一郎
(研究担当)
大阪大学教授



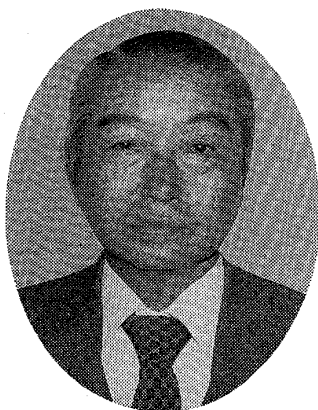
矢ヶ崎 汎
(庶務担当)
日本金属工業(株)取締役



吉松史朗
(研究担当)
金属材料技術研究所
製錬研究部長

監

事



高井 清
合同製鉄(株) 顧問



草川 隆次
早稲田大学教授

新 名 誉 会 員



石 原 重 利 殿
新日本製鉄（株）常任顧問

氏は昭和 18 年 9 月東京帝国大学工学部冶金学科を卒業後、直ちに日本製鉄株式会社に入社し、八幡製鉄所技術研究所、同製鋼部において製鋼技術の研究開発に専念した。その後、八幡製鉄所及び本社技術管理部門の各課長、八幡製造所技術部長、戸畑製造所技術部長、本社技術開発部長を経て新日本製鉄株式会社生産管理部長、取締役、常務取締役、専務取締役技術本部長、技術担当副社長を歴任し、昭和 60 年 6 月常任顧問に就任し現在に至っている。

氏は技術研究所と製鋼部においては造塊技術の体系化による優良リムド鋼塊の製造技術の確立、純酸素上吹転炉製鋼法及び溶鋼真空処理法の技術導入と開発、連続铸造設備の建設と操業技術の開発、高纯净鋼量産プロセスの開発等、今日の製鋼技術の基盤を築いてきた。生産・技術管理部門においては鉄鋼業を取り巻く経営環境の変化に的確に対応するため、連続铸造比率の向上、直送圧延及び連続铸造と圧延の完全直結化、オイルレス操業、各種排熱回収等のコスト切り下げ、省エネルギーなど新技術を織り込んだ諸対策の実行を指揮し、我が国鉄鋼製品の対外競争力強化に著しい成果を収めた。また市場ニーズの多様化・高度化に対処するため販売と技術両部門が一体となつた製品総合戦略企画機能の強化を図るなど、鉄鋼生産技術の進歩発展に貢献した。

本会事業の推進に当たって氏は昭和 46 年 4 月より昭和 61 年 4 月までの間理事を 3 期務め、とくに昭和 50 年 4 月より昭和 52 年 4 月までの 2 年間企画委員長、昭和 59 年 4 月より昭和 61 年 4 月までの 2 年間会長を務めた。この間、共同研究会製鋼部会長、連続製鋼研究委員会委員長、IISI 日本代表技術委員、ISO 運営委員長を務めるなど産学協力研究、国際交流事業の推進に寄与した。

これら卓越した業績により、氏は本会から昭和 30 年俵論文賞、昭和 40 年渡辺義介記念賞、昭和 50 年香村賞を受賞。昭和 59 年大河内記念賞、昭和 59 年毎日新聞社毎日工業技術賞、また国家より、昭和 60 年藍綬褒章を受賞した。以上の他昭和 58 年 9 月より昭和 59 年 11 月まで、科学技術庁科学技術会議専門委員、昭和 60 年 7 月より現在まで日本学術会議会員として斯界に貢献している。

新 名 誉 会 員



井 上 道 雄 殿
名古屋大学名誉教授

氏は昭和 16 年 3 月九州帝国大学冶金学科卒業，直ちに名古屋帝国大学理工学部講師に任ぜられ，昭和 17 年から同 20 年まで海軍短期現役技術科士官として海軍航空技術廠に勤務，同年 9 月には同大学に復帰，昭和 21 年 11 月助教授，ついで昭和 35 年 4 月には教授に昇任して鉄冶金学講座を担当，昭和 55 年 4 月定年により退官，名古屋大学名誉教授となり現在に至っている。

氏はこの間，製鉄から製鋼まで鉄鋼製錬の広い分野にわたり冶金学的基礎研究を精力的に行い，数多くの先駆的研究成果をあげた。初期の研究として，マンガンによる溶鉄の脱硫に関した一連の研究があり，ついで流動層による硫酸焼鉱の選択塩化焙焼による効果的な脱銅，脱亜鉛法を確立した。また直接製鉄における還元鉄の再酸化挙動や酸化鉄の還元挙動について有益な基礎的知見を得た。ついで窒素，酸素などの気体と溶鉄あるいは溶滓との間の反応の動力学的研究を行つたが，とくに溶鉄の窒素吸収や脱窒の機構，物質移動の役割，溶鉄の酸素吸収機構を解明し，さらには溶融スラグの窒素や硫黄の吸収に及ぼす要因を明らかにした。一方液体の注入時におけるガス吸収量を推算する方式を確立し，またエレクトロスラグ再溶解法における精錬反応の本質の解明に新しい知見を与えた。研究の分野におけるこれらの卓越した業績により，氏は本会から昭和 37 年に俵論文賞，昭和 55 年に西山賞を受賞している。

また本会事業の推進に尽力し，昭和 43 年より昭和 57 年までの間に本会理事を 4 期務め，特に昭和 55 年 4 月より 2 年間は副会長を務めた。この間鉄鋼基礎共同研究会溶鋼溶滓部会や特殊精錬部会の研究活動においては主査，討論会座長として指導的役割を果たした。また鉄鋼便覧（第 3 版）の発行に際し，基礎編のうちの製造基礎専門委員会委員長として高い識見をもつて編集にあたり，面目を一新した内容とすることに大きく貢献した。

氏はさらに，第 3 回日独セミナー（昭和 53 年，デュッセルドルフ）及び第 4 回日独セミナー（昭和 55 年，東京）では日本代表を務め，また第 5 回，第 6 回の真空冶金国際会議にも本会より派遣されて出席し，第 7 回（昭和 57 年，東京）の会議では実行委員長を務めて大きな成果を収めるなど本会国際交流事業の推進に寄与した。

新 名 誉 会 員



盛 利 貞 殿

京 都 大 学 名 誉 教 授

鉄 鋼 短 期 大 学 学 長

氏は昭和 17 年 9 月京都帝国大学工学部冶金学科を卒業工学部講師を嘱託され、併せて海軍短期現役に服務、昭和 20 年 9 月同大学に復員帰学、昭和 22 年 11 月助教授に補せられ、昭和 27 年 8 月には工学博士の学位を取得、昭和 33 年 7 月教授に昇任して鉄冶金学講座を担当し、昭和 57 年 4 月停年退官、京都大学名誉教授の称号を授けられるとともに鉄鋼短期大学学長に就任し現在に至っている。

氏は鉄鋼製錬の熱力学に関する広範な研究を行っているが、その主要なものは次のとおりである。

(1) 鉄-砒素系合金状態図の作成をはじめとする鋼の機械的性質に及ぼす砒素の影響の研究、鋼の遷移温度と合金元素、オーステナイト結晶粒度と合金元素の関係など鉄鋼材料に関する研究。(2) 鋼中の非金属介在物の析出平衡に関する熱力学的研究およびオーステナイト中の窒化物、炭化物、硫化物の析出平衡の測定ならびにこれに基づく鋼材熱処理法の熱力学的基礎の確立。オーステナイトおよび溶鉄中での非金属元素の相互作用係数の測定およびその理論的、実験的検討。クヌーゼンセル質量分析法による高融点金属合金の活量測定およびイオン強度熱分析法による高温状態図の検討。さらに固体電解質の酸素センサーへの応用を目的とした酸素透過性、イオン輸率、あるいは分極現象などの解明と各種酸化物の標準生成自由エネルギーならびに各種合金の活量測定など鉄鋼製錬の熱力学的研究。

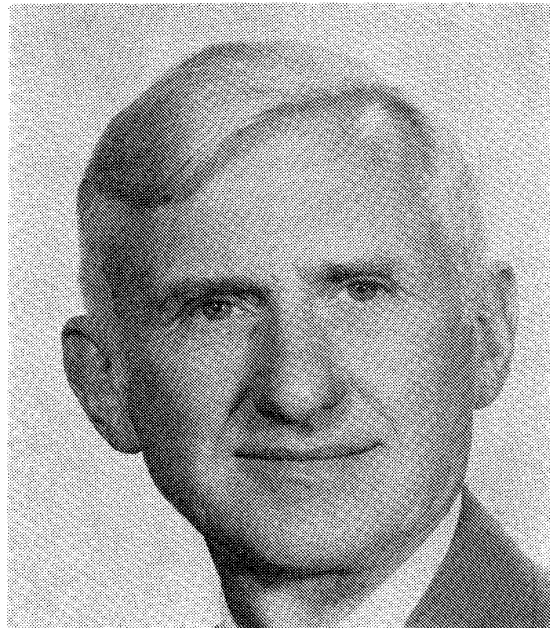
(3) 昭和 24 年いち早く行われた CaC_2 、 CaO 粉末吹き込みによる溶銑脱硫、ラテライト鉍の脱 Ni など鉄鋼製錬技術に関する研究などである。

また、本会事業の推進に当たって氏は昭和 40 年 4 月より昭和 53 年 4 月までの間に本会理事を 3 期務め、特に昭和 46 年 4 月より 2 年間研究委員長、昭和 52 年 4 月より 1 年間副会長を務めた。また氏は第 3 回 (昭和 46 年)、第 4 回 (昭和 48 年) 日本・ソ連製鋼物理化学シンポジウムの本会責任者を務めた。

これらの卓越した業績により氏は本会から昭和 31 年に俵論文賞、昭和 50 年に協会事業功労賞、昭和 54 年に西山賞、昭和 60 年に製鉄功労賞をそれぞれ授与されている。

以上の他、日本金属学会からは昭和 44 年に谷川・ハリス賞を授与され、昭和 59 年には第 29 回本多記念講演を行った。

新 名 誉 会 員



Metron C. FLEMINGS 殿

マサチューセッツ工科大学教授

氏は 1951 年 Massachusetts Institute of Technology を卒業、1954 年同大学で Doctor of Science の学位を取得、直ちに American Brake Shoe Research Laboratory に就職、2 年後 MIT に助教授として招かれ、1969 年教授に昇任、Center for Materials Science and Engineering の副所長 (1973-1977)、Ford Professor (1975-81)、1979 年材料加工の重要性に自ら Materials Processing Center を創設し、1982 年までその初代所長を併任、1981 年 Toyota Professor of Materials Processing、1982 年 Department of Materials Science and Engineering の Head となり現在に至っている。

氏の研究は鑄造凝固過程に表われる諸現象の機構を科学的に解明し、それを制御することにより、材質に新たな性質を付与し、また新材料を開発し得という確固たる信念で貫かれ、既に多数の業績をあげている。例えば初期における合金の流動性に関する研究は注入性を飛躍的に向上させる原点となり、従来の鑄造技術に関する解析、鑄造欠陥を対象とした研究や凝固組織の加工による変化と材質に関する研究は鋼塊や鑄物の健全性の向上に大きな役割を果たした。その後のミクロ偏析マクロ偏析についての理論的、実験的解析、凝固中の二次介在物生成、過冷凝固などの凝固組織形成についての解析を材質向上を見すえながら推進した。その間方向性凝固による複合材料製造のための研究では高温度勾配凝固技術を開発、また Rheocasting という新しい概念の鑄造法を開発、固液二相共存状態での加工の可能性を拓き、さらに凝固過程に電磁力を利用、バンド状組織やリップルマークの消去を具体化した。200 を越える有益な研究論文は鑄造・凝固に関する 3 つの名著とともに斯界の学術的発展と技術開発に大きな貢献をした。

これらの業績に対し、氏は湯川記念講演をはじめ、米国のみならず英、独、仏、伊の関連学会で名誉ある 8 つの記念講演を行って居り、米国 ASM、AIME、仏、伊の金属学会から 6 つの Gold Medal を受賞している。

ASM の Fellow、National Academy of Engineering の会員、American Academy of Arts and Science の会員で、日本鑄物協会の名誉会員にも選ばれている。

氏は科学技術の国際交流に早くより努力し、特に日本との交流を重視し、1976 年来凝固に関する日本学術交流委員会の米国代表である。また、日本の学界業界から氏の研究室を訪ねた者は数えきれず、氏の研究室に滞在して学んだ者も多数にのぼり現在日本で大いに活躍している。